

## 《教育講演 5》

## 循環器核医学の基礎と臨床:EBMを活かす

中 嶋 憲 一

(金沢大学 核医学診療科)

心臓核医学検査は心疾患を有する患者において、その診断から始まって、リスク評価、治療効果判定、予後評価に至るまで、多くの核医学検査の中でも明確に有用性が認識されているもののひとつである。本邦における死亡原因の中でがんと並んで主要な位置を占める心疾患、とりわけ虚血性心疾患においては核医学検査が重要な役割を果たすことができる。米国では、多数の系統的な症例の蓄積によりこの心臓疾患における核医学の実際の役割がよく認識され、これが米国心臓協会/心臓病学会/心臓核医学会 (AHA/ACC/ASNC) を中心に策定された心臓核医学ガイドラインにも集約されている。このような多数のエビデンスの蓄積は本邦においてははまだ不十分ではあるが、基本的な心臓核医学の利用指針の原則は共通するものが多い。心臓核医学に携わる核医学・放射線科医師の立場からは、単に所見と診断の記載のみでなく、患者のケアにどのようにこの情報が活かせるのかを示す必要がある。また、循環器診療に直接携わる臨床医の立場からは、進歩がめざましい多種類の診断法の中でどのように核医学を用いると有効なのかを認識する必要がある。

本邦における特殊性としては、ヨード製剤である脂肪酸イメージング用のI-123 BMIPPや交感神経イメージング用のI-123 MIBGの普及があげら

れるが、日本独自のエビデンスも活かされるべきであろう。さらに、F-18 FDG供給がまもなく開始され、その主たる利用が腫瘍診断になることは間違いはないが、FDG心筋PET(coincidence対応SPECT装置を含めて)を用いる適応症例も今後増えるものと予想される。一方では、医療経済を重視する昨今の情勢を考えると、医療全体としてのコスト削減にどのように貢献するのかという視点も重要になっている。

この教育講演では、現在エビデンスとして心臓核医学の利用が確立しているいくつかの領域に絞って、どのように心臓核医学を活かせるかを考えた。

- 読影の標準化の必要性
- 心筋血流と壁運動を同時に評価することの重要性
- 急性期の診療にどのように用いるか
- 梗塞後の診断とリスク評価および予後
- 非ST上昇型梗塞・不安定狭心症における効果的利用法
- 日常診療で冠動脈疾患が疑われる患者での利用法
- 心臓核医学検査が正常のときの考え方と注意点
- 心不全の患者にどのように用いるか
- エビデンスを活かすことの意味